



*adult part*

## 01・眠れる森の魔女

前日譚『05・蠟の翼の可動領域』から一時間後。

十一月上旬。時間帯は十六時ごろ。天気は雨。外の気温は十三度程度で、部屋は暖かい。雨の勢いはそれなりで、かなり冷える。

主人公は、すでにすべての治療を終えた。

今はサリアの屋敷内にある、客間のベッドに寝かされている。

この部屋は、主人公を転移させる前から、サリアがひそかに用意していたものだ。いつか主人公をこの家に迎えたら泊めたいと思っていた『お姫様の部屋』である。

家具も調度品もとびきりおしやれで高級で、それ自体が宝石みたいなドレッサーがあつて、天蓋付きのふかふかのベッドがあつて。

温かい暖炉があつて、勉強に最適な机と参考書があつて、日当たりが良くて……。とにかく居心地のいい場所だ。

問題は、これはあくまで『サリアの思う』素敵な部屋であつて、主人公好みの場所かどうかはわからない事だが……。

そんなサリアは、窓辺に立って外を見つめながら、主人公が起きるのを待っている。しばらく雨の音を聞いて、一度時計を見て。

それから、ふとベッドを見やると、ちょうど主人公が目を開けた。

……ああ、やっぱり可愛いなあ。

これで本当に『やっと会えた』って感じだね。主人公ちゃん。

——なのにあたし、きつとあなたの思ってるような感じじゃなくて、ごめんね。

サリア、ようやく対面した主人公への想いがこみ上げるが、今はそれどころではない。

## SE1 .. 雨の音

【最初から最後まで流し、トラック終了まで繰り返す】

【0―5秒ほどまで流してSE2】

サリア、主人公の方へ静かに歩いて行く。

主人公が目覚めたのは非常に喜ばしい。

だが、明るくテンションを上げられる状況でもない。

SE2 ..サリアの足音

【最初から最後まで流す】

【ストーリーパート05のSE2と同じ音】

●中央 少し遠い

「あくまで落ち着いて話しかける」

ああ。起きましたか。おはようございます♡

【優しくたずねる】

気分はいかがですか？

【少し間をあけてから。笑っているがテンションは高くない】

あは。一度言ってみたかったんですよこのセリフ。

いかにも『悪』って感じですよね？

【少し間をあけてから。優しく制止する】

ああ。起き上がれないと思いますから、そのままでもいいですよ。

あたしがそっち行くんで。声も出ないでしょ？」

サリア、主人公の方へさらに近づいて、ベッド脇に立つ。

ちょうど、主人公の顔の横に来る位置である。



そんなサリアを、主人公は何が起きたのかもわからないまま、ぼんやり見上げている。全身にかけられた麻酔のせいで、彼女は今、まともに思考する事もできない。

SE3 ..サリアの足音2

【最初から流す】

【ストーリーパート05のSE2、アダルトパート01のSE2と同じ音】

【0―2秒ほどの、二歩分の『コツ、コツ』のみ流す】

●中央

【「すごく優しく」

顔に傷がつかなくて良かった」

サリア、主人公の方へさらに近づく。顔のすぐ近くの距離まで来る。

その表情がとても優しく、いとおしげなので、主人公は『もしかして』と思う。期待で胸がいつぱいになっていると、その顔がさらに近づき、唇が触れた。

●中央 至近距離

「額にキスする」

ちゅ。

もしここに取り返しのない怪我があったら、あたしでも治せなかったかもしれない。ん。

【瞼にキスする】

ちゅ♡

ご安心下さい。あなたの身体は、責任を持って全部綺麗にします。

こんな事があった事自体、忘れるくらいにしますからね」

主人公、目の前の見知らぬ女性こそが、きっと、妖精さんを操っていた『魔法使いさん』なのだろうと考える。

だから自分を助けてくれて、こんな優しい目で見つめてくれるのだ、と。

だが、まだ確信に至るには早い。

なので、ひとまず『ここはどこですか』『あなたはだれですか』と質問しようとする。

〈主人公〉

「……？」

だが、なぜか思うように声が出ない。

それなら、と、主人公は必死に頭を巡らせる。

確か自分は、荒野でモンスターに襲われ、大怪我をしたはずだ。

しかも、妖精さんとの通信は直前に途絶えたまま。

仮に彼女が妖精さんなら、自分はどうかやってここまで運び込まれてきたのだろうか？

……という事は、この人は妖精さんではないのだろうか？

〈主人公〉

「あ……。……。あ……。？」

主人公は今、自分の事よりも、とにかく体調を崩していた妖精さんの事、そして妖精さんと今後連絡が取れるかどうかが心配だった。

なので、どうにかもう一度『あ』と発声したつもりだったが、それは自分の耳にすら届かなかった。

おまけに頭がぼーっとして、必死の考えもどんどん霧散していく。

残念な事に、元々自分はあまり賢くない。

それでも、もう少し頭はスッキリしていたはずだ。

どうして？

……でも、とても心地いい。

けど……何もできない。

主人公は今、今にも眠ってしまいそうにうとうとしながら、自分以外何も存在しない温かい水の中に、ふわふわと浮いている気分だ。

サリア、それでも主人公が何を言おうとしているのか理解する。

●中央 至近距離

「【優しく頷く】

うん？ 覚えてらっしゃるんですね。

そうです。あなたはモンスターに負けて瀕死の重傷を負った。それを回収したのが、あたし。

【あくまで普通のトーンで言う】

悪い魔女のサリアちゃんです♥」

〈主人公〉

「……………」

主人公、妖精さんだと思っていた彼女が不思議な事を言い出すので、戸惑う。

悪い魔女、とは？

……というか、ものすごく眠い。

とても大切な話を聞いているのに、集中力が維持できない。

起きていようとする事だけで精いっぱいだ。

だが、眠ってしまうのだけはダメだ。

妖精さんは『絶対に目的を果たしたいなら、相手の事をよく見ろ』と教えてくれたのだ。であれば、私はまず、この『サリア』という人を観察しなくてはならない。

対するサリア、そうだ、まずは自己紹介をしなくては、と気づく。

サリアは、主人公が自分を妖精さんだと気づくはずがないと思っている。

### ● 中央 至近距離

「予想はしていたので、いつものトーン。今度の『あは』はちょっと笑っている」

あは。『誰?』って顔してる。

「内心やはり傷つく。声のトーンが少し下がる」

そりゃわかんないですよね。

【声のトーンが元に戻る】

じゃあ、これでどうでしょう。

【少し間をあけてから。妖精さんの声になる】

私だよ。勇者ちゃん」

〈主人公〉

「……！」

主人公、その瞬間、再び期待に胸をときめかせる。

やっぱりサリアさんが妖精さんだったのだ！

だが、まだ百パーセントではない。彼女が妖精さんを騙っているだけかもしれないのだ。でも、それなら、私たちの関係はともかく。声までここまで似せられるだろうか？

ああ、眠い。またわからなくなってきた……。

主人公の意識は今、少しでも油断をすれば、眠りの谷底へ落ちていきそうだ。

主人公はそれを、上から垂らされた細い布一本にすぎると感じるような気持ちで維持している。



●中央 至近距離

「今度は伝わったみたいですね？」

そうです。あなたの冒険をお手伝いしていた仲間。

機械でできたお人形の『妖精さん』。あれ、サリアちゃんだったんです。

【全く緊張していない様子で】

これまでずっと通信機ごしにおしゃべりしてましたから、何だか緊張しますね♥

【一呼吸おいてから】

改めまして始めまして♥

【サリアの声のままで言う】

勇者ちゃん。妖精さんだよ。こんな形になっちゃったけど。お姉さん、会えて嬉しいよ♥」

〈主人公〉

「……！」

主人公、これを聞いて、驚いて起き上がろうとする。

今度こそ、彼女を妖精さんだと信じて、抱きついてもいいのではないかと思う。

一瞬だけ、サリアがかけた麻酔の力を凌駕するほどのエネルギーが身体に満ちる。

だが、それは長く続かない。

結局主人公はほんの少しも動く事ができないまま、話を聞き続ける事となる。

●中央 至近距離

「先ほどと同じように、優しく制止する」

ああ。ダメですよ。動こうとなんかしないで下さい。

ていうか指一本動かせないでしょう？

【優しく言い聞かせる】

今のあなたには、かなり強力な麻酔が施してあります。

これ、結構ヤバイ薬なんですけど。

これのおかげで。

あなたは怪我と、その治療による、いつ狂ってもおかしくない程の痛みを一切感じず。

むしろ全身ふわふわあったかくい？ みたいな気持ちでいられる訳です。

【少しでもテンションを上げて可愛く言う】

サリアちゃんが天才でよかったね♥ これ作るの、すっげー大変なんだぞ♥

【少し間をあけてから。声のトーンが元に戻る】

だね？ サリアちゃんこれまで、一人悪と戦うあなたの事、ずっと妖精さんとして、遠

く。つか、この家からお手伝いしてきましたけど。

あなたの事『立派な勇者様にする』って約束で一緒に頑張ってきましたけど。  
あれ。反故にさせていたいただきますね♥」

〈主人公〉

「……!?!」

主人公の表情が曇る。それは、妖精さんならば、まず言わない事だからだ。

これは果たして、妖精さんの本心なのだろうか。

それとも、やはり自分と妖精さんの関係を知る誰か……つまりサリアさんが妖精さんを騙っているだけののだろうか。

わからない。目の前にいるこの人が、自分の大好きな人なのか、わからない。

サリア、動揺する主人公を見て、胸を痛める。それでも、悪を演じる事に徹する。

主人公に話した事はすべて真実だ。

だが、たとえば彼女がこの話を信じてくれなくても、自分のやる事は一つなのだ。

主人公の身体は、麻酔こそかかっているが、それは完全ではない。

このままでは治療の痛みが麻酔の効果を凌駕して、主人公はその苦しみには耐えられない。身体よりも先に、精神が壊れるだろう。

それを回避するには、麻酔の特性を利用し、その効力を増幅するしかない。問題は、それがとても推奨されるものではない事だが……。

●中央 至近距離

「少し低く冷たい声になる」

気が変わったんですよ。こんな姿になったあなたを見て。

「苦々しく。さらに声がワントーン下がる」

もうこんなの絶対やだなあって。

あなたこんなに可愛いのに、理不尽に戦わされて、やりたくない事やらされて。その癪ろくな見返りもなくて。

「少し間をあけてから。暗い声で」

あげく、襲われて、一人で死ぬところだった……。

「少し間をあけてから。静かに怒りをにじませる」

おかしくないですか？

「元のトーンに戻る」

だから、もう二度と頑張って欲しくないな♡ っと思ってるんです♡」

サリア『あなたの事、大好きだから』と言おうとしてやめる。  
隠す事ではないが、今それを言うのは、あまりにも卑怯な気がした。

●中央 至近距離

「『つゝ事で』は『という事で』という意味」

つゝ事でサリアちゃん決めました♡

あなたの事。勇者の座から引きずりおろして。

サリアちゃんの奴隷にしまゝす♡」

SE4 ..サリアが『ぱちぱちぱち』と小さく手を叩く音

【最初から最後まで流す】

【四回繰り返して流す】

【小さめの音量で流す】

●中央 至近距離

「これから勇者様の事、レベルドレイン。」

「『レベルドレイン』の意味がわからないと困るので説明する」

つまり、これまで得た経験値を全部吸い上げて、よわっよわに無力化させます。  
で、いずれあなたの左胸にある勇者の刻印。

これも剥がして、勇者の資格を剥奪します♥

聞いた事あるでしょ？

【ここから※マークまで、一つに行ずつ、ややゆっくりと、一つずつ説明するイメージで】

これが奪われた時点で、勇者のみが受けられる加護は失せて。

生きていても、死んだ人扱いになる。

死んだ人扱いになってしばらくしたら。

新しい勇者様が教会から選ばれるので、もう頑張らなくてよくなる♥

※

【少し間をあけてから】

先代勇者も、そうやって勇者の仕事から逃れたんですよ？

そういう卑怯者がすでにいるんですから。

あなたもそうなっちゃっていいと思います♥

【布団をかけられた、主人公の左胸を見つめながら】

てか、こんな所にあっただんですね。

これまで、どうりで見つけられなかったはずですよ。

【一呼吸おいてから】

治療のためとはいえ、勝手に裸にしちやってごめんなさい。



まあ、これからは裸が当たり前の生活になるんですけどね♥」

〈主人公〉

「……！」

主人公、それを聞いて、初めて自分が裸になっている事を知る。

そのくらい今の自分には、正常な感覚がないのだ。

そしてサリアの『これまでどうりで』という言葉から、次の事を推測する。  
つまりサリアは、以前から自分の事を観察していた。

でも、自分が左胸を露出している場面には遭遇できなかったのだ。と。

思えば妖精さんは、私には必要以上に気を遣っていた。

私は構わないと言ったのに、たとえば着替える時は必ずどこかへ行ってしまったし、お風呂で話そうと言っても、拒まれた。

その時は『実は正体は男性なのかもしれない』とか『機械だからお風呂はダメなのかも』程度に推理していた。だがもしかするともっと単純に、自分を大事にしてくれていただけなのかもしれない。

じゃあ、この人はやっぱり……？

しかし、サリアは、主人公が必死に思考を巡らせて『サリア』と『妖精さん』が同一人物であるか確かめようとしている事など知るよしもない。

単に、これから何をされるか察したのだろうと考えている。

●中央 至近距離

「わざと悪っぽく、軽薄にふるまう」

あ。何か察しちやった感じですか？ おそらく大正解です♥

「一呼吸おいてから」

あたし、実は何も、勇者ちゃんの事ずっと大好きでしたから。

「とても優しく」

だからずっと、会いたかったんだよ。

「少し間をあけてから」

あたし達。つか、あなたと妖精さんって、付き合ってるみたいなものだったじゃん。

嬉しかったんだぜ？

あたし相当キャラ作ってましたから。

あなたが好きなのは『機械人形の妖精さん』であって。

中の人のあたしじゃないってわかっててもね。

【少し間をあけてから】

機械人形ごしだったけど。

【甘く。少しだけ声がかすれる】

キスだってしてくれたじゃん……」

その時、サリアと主人公の目が合う。

主人公、優しく、でもどこか切なげに自分を見つめるサリアの顔を見た途端、彼女こそが『妖精さん』である事を確信する。

激しく心が揺さぶられ、大きな声でその名前を呼びたくなる。

だが、やはり声は出ず、何もできなかった。

対するサリアは、もう主人公の意思をすべて無視すると決めている。

主人公の動揺から目をそらして、ただ自分の伝えたい事だけを話す。

● 中央 至近距離

【「少しだけ真剣に、少し低いトーンで」

ねえ。いつか、あたしが何者でも好きだって言ってくれたの。まだ有効ですか？

これからあなたの一番大切なものを奪う人になっても、まだ好きでいてくれる？」  
主人公、答えられず、ただサリアの方を見つめる。

本当は『はい』と答えたかった。

自分は誰よりも彼女を愛している。

彼女になれば、自分は、どんなものでも捧げるだろう。

だけど、そう答える事は自分、いや、自分たちのこれまでを否定する事にはならないだろうか？

自分たちは『世界を救う』という目的でつながっていた。

だから、勇者とその仲間だったし、生徒と教師だったし、妹と姉だった。

それから友人でもあって……そして、恋人に等しい関係だったはずだ。

それとも、サリアにとってはそうじゃなかったのだろうか。

そうじゃなかったから、今こんな事を言うのだろうか？

わからない。それを考えるには、主人公の身体は、あまりにも弱っていた。

5秒ほど間。

● 中央 至近距離

「わざとどうでもよさそうに言う。自分の未練を断ち切るように」  
ま。どっちでも関係ないけど。

「一呼吸おいてから」  
とにかくあなたの事、これからあたしのものにするんで。  
なすすべもなく。犯されて下さいね？」

このままフェードアウトして終了。